

第3師団3300人「進めぬ」

一月十七日午前十時、兵庫県からの出動要請を受け取った姫路駐屯地の第三特科連隊警備幹部中村博(四七)は直ちに連隊長林政夫(四七)に伝えた。自衛隊が「近傍派遣」から「出動体制」へと変わった瞬間である。「災害派遣要請」の情報は一気に中枢へと駆け上がるように二つの脈を通じて防衛庁に届けられた。連隊長―第三師団長―中部方面総監―陸幕長に至る指揮系統と、連隊三科長―第三師団三部長―中部方面総監部防衛部長―陸幕防衛部運用課長へと通じる業務系統だ。ともに電話だった。

十時四十分、防衛庁本庁舎三階で始まった長官玉沢徳一郎(五七)の定例記者会見でも、その内容が早速報告された。

災害派遣要請を受けた第三師団は総勢五千人。中部方面管内部隊の応援を得て、三千三百三十三人を投入するという空前の陣容で派遣を決定した。重迫けん引車、高軌道車、トラックに乗った部隊が動き出した。

ところが、想定を超えた大交通渋滞が待っていた。神戸市を受け持つ第三特科連隊は、県庁に向かった連絡幹部から「進まない」との連絡を受けていた。国道二号線で民間の車となるようにしても、進まない。十時十五分に出発する本隊三十六台(二百十五人)に林はパトカーをつけた。八二年から二年間、外務省に出

向。要人警護のパトカーが大渋滞でも、車を分けて進むのを知っていた。経験から学んだ機転だ。それでも、六十キロに三時間を要し、午前中には目指す長田区に着けなかった。

車両七十四台(四百人)で出発した福知山市の第七普通科連隊は、国道一七六号線を走行。兵庫県へ入った途端、渋滞に足を取られた。隊員が交番へ走り、状況を聞く。ガソリンスタンドの電話に走る。「進めません」。師団に連絡。スタンドのテレビを見た連隊長武田能行(四六)らが、被害の大きさを知った。

宇治市の大久保駐屯地第三施設大隊の百人は、比叡山で訓練登山中に、連絡幹部を通じ派遣命令を聞いた。大久保駐屯地へ戻り、パワショベルやブルドーザーを乗せたセミトレーラー(六トン)で伊丹市の千僧駐屯地へ。師団からパトカーの先導を受けられると聞き、吹田ICで降りた。だが、パトカーは不在。

気負い込んで緊急出動した大部隊は、思いがけない「敵」に包囲されて、時計をにらんではいじりしていった。

「第三師団で処理できる」と計算していた陸自中部方面総監部の総監松島悠佐(五七)の構想は、現地入りを前に崩れ去った。各部隊からの情報は「進めません」「動きません」。悲鳴ばかり。「師団がやりやすいように支援しろ。必要以上の報

告を求めるな」。午前中の総監部作戦会議で、そう命じていた松島の顔に苦悩が浮かんだ。

自衛隊は絶えずいろんな敵に備えていた。戦争なら敵が侵入する情報を事前にキャッチする手段も能力も持っている。災害の場合だって、台風や洪水なら気象

レーダーを見据えて的確に部隊の事前配備ができる。だが、今回は違った。地震と交通渋滞という敵を前に、無力感だけが込み上げていた。決断が遅れば遅れるほど、救援は困難になるという教訓だ。

午後一時半、警察庁発表

「死者四百三十九、負傷者千三百七十七、不明者五百八十三、倒壊家屋千九百七十一……」

自衛隊が目指す任地では、惨状の全ぼうがようやく明らかになりつつあった。



三宮センター街一丁目

1946年にオープン。250メートルの商店街には92店舗があった(神戸市中央区、1月17日撮影)